

## 《第十一回「新しい歴史教科書をつくる会」東京支部総会、活動報告》

皆さん今日は。東京支部長の島崎で御座います。本日は梅雨の合間の晴れ間、皐月晴れと言うそうですが、土曜日の昼下がり、お暑い中をつくる会東京支部総会にご参集賜り有難う御座います。

只今より平成20年度、過去一年間の東京支部活動報告としてその概要をお話しさせて頂きます。

今年は「つくる会」にとって3回目の採択の年になりますが、皆様ご存知のようにこの4月9日には唯一、「つくる会」の【自由社版・新編、新しい歴史教科書】だけが60年振りに改正された新教育基本法を先取りして、従来の【扶桑社版・新しい歴史教科書】の内容を一新し、文科省より検定合格となりました。

今、このような素晴らしい教科書を手にして、過去三年間の「つくる会」が辿った道程を想いますと、いささか感慨深いものがあるのは、会員の皆さん遍く共通のものかと想います。会消滅の危機を乗越え扶桑社と袂を分かち会員の力だけに支えられて、ようやくの思いで商業主義の頸木から解き放たれ、現時点ではこれ以上望むべくもない、真正保守の歴史教科書を世に出す事が出来ました。

つくる会は創設以来、丸12年が経っております。昨年の本部総会で藤岡会長がいみじくも述べておりましたが、このような商業主義に縁のない、先ほど朗読された設立趣意書の下に集う、減ったとは言え数千人の会員がボランティアとして支える会が10年も続く事、自体が極めて稀なのであり、ましてやあのような素晴らしい教科書を世に問う事が出来たという事はまさに奇跡としか言いようがありません。

勿論その過程に於いては、才能溢れる関係者全ての並々ならぬ精神的、肉体的な献身があった事は言うまでもありません。出版を思い立ってから検定申請までの極めて短い編集期間、聞く所によりますと僅か三ヶ月程であったとの事です。つくる会設立趣意書の下に集う者たちにのみ出来た神がかりな行為なのであります。

その後も検定合格までの一年間は、教科書出版に些か不慣れな自由社の体質より発生する様々な問題を材料に左の勢力、右の勢力から文科省へ頻りに横槍が入られ、検定不合格に貶めようとする試みが頻りに画策された一年間でした。たった一冊の教科書の検定でこれまであり得無かった、3月末日から4月9日への検定発表のずれ込みと言う、有能な文部官僚としては自らを許す事の出来ないような苦しい状況に何故追い込まれたのかを考えてみれば、合格、不合格、どちらに転ぶか最後の最後まで分からなかった、厳しかった、その際どい状況を想像に難くはありません。

検定、出版までの道程は極めてか細い、危険極まりない、何か陰の大きな力に支えられて初めて乗越え辿り着く事の出来た道程でした。

平成18年11月に扶桑社から突然、内容が過激すぎるので採択が伸びない、との商業主義的理由で「新しい歴史教科書」の継続発行を拒否され、その上、八木秀次氏とそ

のグループにお先棒を担がせて、扶桑社は「つくる会」の乗っ取りまで企てたのでした。ご存知のように「つくる会」は大混乱に陥り存亡の危機に直面したのであります。

その際、我々多くの会員は本部と一体となって、19年5月にはあくまでも「つくる会」発足時の「設立趣意書」に基づく教科書をつくり続けると宣言し、「つくる会」は扶桑社と縁を切ったのであります。

今、振り返れば歴然として明らかな事ですが、共産党独裁でありながら市場経済を標榜する中国の興隆、台頭に機を合わせたトヨタの中国進出がターニングポイントとなって、日本の産業界が雪崩を打って中国に進出し始めました。マスメディアもその動きに同調し、商人国家、日本の枠からはみ出る者はそのうねりに押し潰されてしまう状況となったのです。それまで保守と言う一つの枠で捉えられていた集団も時代の激しい転回に振り飛ばされる者、ぶれない者への分別が始まったのです。

それは<東京支部>が<三多摩支部>、<誇りある日本をつくる会>と共催で早い段階に開催した田母神氏の講演会、又、氏の論文をめぐる世の中の動きに良く見られますが、それが真正保守と似非保守に峻別されるリトマス試験紙となり、反応如何によってこれまでの保守がはっきりと分別されつつあるのです。

又、本日も今この時間にNHK周辺で行われておりますが、戦前の日本と台湾の関係について、とんでもない歴史捏造をした番組<ジャパンレビュー>についてのNHKに対する抗議デモですが、東京支部も三多摩支部と共に主催者に名を連ねており、これまで藤岡会長、杉原副会長、又加瀬自由社々長も参加されてつくる会の基本的な姿勢を示されましたが、このような歴史捏造が何故今日の日本の状況で行われるのかとの問題提起をしているのであります。

私は昭和15年生まれですが、戦後のNHKによる「真相はこふだ」と言うGHQ主導の洗脳プロパガンダ放送を小さいながら鮮明に記憶しております。今回の一回目の<ジャパンレビュー>を見て聞いて、これを三年続けると言う企画意図に、私の頭の中では「真相はこふだ」が二重写しになったのでした。今、日本の働き盛りの層に食い込んでいる70年安保世代、極左の連中の蠢く姿が想い浮かぶのであります。

NHKの福地会長が100%この番組を擁護しておりますが、アサヒビールの今日の興隆を齎した氏が、数年前の上海に於ける日本領事館に対するデモの折、早々と頭を下げ中国に媚を売り、最近ではアサヒビールが中国のビール会社を買収しつつ中国でのシェアを急速に伸ばしているのを見ると、反日で日本を貶め中国共産党独裁政権の対日広報部門となった感のあるNHKのトップとしては正に相応しいキャスティングであったと言えましょう。

余談ですが、今日のこの総会の後で開かれる懇親会でビールは決してアサヒは出しませんのでご安心下さい。その店で生はアサヒだけしか置いてありませんが、特別にキリンのビン生を用意してもらいました。NHKがこの問題できちんと誤りを認め、糺すべきを糺して公正な報道機関として立直るか、少なくとも福地会長を更迭しない限り、つくる会関係者にとってアサヒはご法度として参りたいと思います。

なお、東京支部はチャンネル桜の報道をベースとしたこの共催デモに先立って、靖国神社春季例大祭に於ける恒例の東京支部広報活動でNHK糾弾のビラを配布し、又、第一回目の共催デモに先立つ事、二週間前に三多摩支部と合同でNHK正面入口前で抗議活動を展開いたしました。

又、一昨日発表されましたが、この件に関するNHKへの集団訴訟が、史上最多数の8400人の原告団で提訴されました。原告弁護人の中には当会副会長の高池勝彦氏も加わっております。この会からも多くの会員が原告に名を連ねており、この提訴が左翼に牛耳られ、事勿れ主義に墮して公正な報道の責務を放擲した日本の大マスコミに対する頂門の一針となるよう東京支部として、これからも全面的に協力してまいりたいと思います。

日本のマスコミは10人から20人位の原潜入港に対する反対デモを大々的に報じながら今回の1000人を越える、しかも三回も立て続けに行われたデモを一切報道せず無視を決め込んで居りました。さすがに25日の集団訴訟発表については産経を始めとする各社が取り上げざるを得なくなりましたが、それまでは産経が二回目の時にベタ記事でおざなりに報じただけです。日本には最早報道の自由が消滅していると言っても過言ではない状況となっております。

このような状況下で「つくる会」を振り返りますと、両三年に「会」を襲った混乱を未だに理事、先生方の単なる個人レベルの内紛としか見なさず、事の本質を理解出来ないで、事大主義的に、大同団結を錦の御旗にして扶桑社や産経グループの応援する「教育再生機構」に、多くの会員が流れて行った事は誠に残念でしたが、呉越同舟が解消され、運動体として現在の「つくる会」はかえって強靱になったのではないかと考えております。

一方扶桑社は、内容が過激だと言って発行を拒否した「新しい歴史教科書」を、口をつぐんでそのまま採択に附すという支離滅裂な行動を臆面もなくとり、この教科書で学んできた子供達や採択した教育委員会を惑わすと共に、「つくる会」執筆陣の著作権をないがしろにした扶桑社の行為は、社会的にも、道義的にも、法律的にも許されない暴挙と言わざるを得ないでしょう。

何はともあれ、一時は存亡の危機を迎えた「つくる会」が、発足時以来の全てのしがらみを排して、由緒ある出版社の自由社と共に、「設立趣意書」の原点に戻り「新編・新しい歴史教科書」の発行に漕ぎ着けることが出来たのは、関係各位の情熱とご尽力の賜であり、かつ会員の皆様、賛同者各位の暖かいご支援あったればこそで、ご同慶の限りであり、皆様と共に喜びを分かちあいたいと思います。

李鵬前中国首相の「二拾年以内に日本は消滅する」との予言が正に的中しそうな、混沌の極みを迎えた感のある今日の日本の状況は、あるいは幻に終わるかもしれない真正保守政権の擁立が叶うまで、いずれその時を迎えるまで、我々は確かな基盤造りの一端を担って行かなければなりません。「つくる会」運動の使命は極めて重いものがあります。

先ほどお聞き頂いた「つくる会」設立趣意書、12年前の設立時そのままの趣意書ですが、今、正にその真正なる保守の精神は今日にあっても益々我々の運動の確かな原点となるものであります。今、その精神の下、新生「新しい歴史教科書をつくる会」の再出発を、【自由社版・新編、新しい歴史教科書】を発行する事をもって皆さんと共に確認するものであり、これから先、大切に慈しみ大きく育んで行かねばなりません。

私達は見識のない日本の、世界のマスメディアに振り回されるのではなく、会員自らの手で私達の新しい教科書を、自信を持ってアピールすべきではないでしょうか。その為には多くの国民に市販本をしっかりと読んで戴き、国民の間から私達の教科書への支持が広がるようにすること、それが採択運動を成功させる最も重要で確実な手段でありましょう。

必ずや道は開けます。倦まず、弛まず、諦めず、50年掛けて深化した自虐史観からの解放には50年掛かる事を覚悟して、共に力を合わせ頑張って参りましょう。

以上を持ちまして活動報告とさせていただきます。ご清聴有難う御座いました。